



TITLE:

# 京都大学言語学懇話会 2003-2004年度活動報告

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都大学言語学懇話会 2003-2004年度活動報告. 京都大学言語学研究  
2004, 23: 211-218

ISSUE DATE:

2004-12-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/87838>

RIGHT:

京都大学言語学懇話会  
2003 - 2004 年度  
活動報告

第 6 3 回例会

2003 年 12 月 20 日(土) 午後 1 時 30 分～4 時 45 分

京大会館 102 号室

研究発表

平家正節から推定されるアクセントとイントネーションについて  
—無譜記部と連接墨譜記の解釈を中心に—

前田 広幸 (奈良教育大学)

量の表現における否定的／肯定的スケールについて

服部 匡 (同志社女子大学)

第 6 4 回例会

2004 年 4 月 10 日(土) 午後 1 時 30 分～4 時 45 分

京大会館 102 号室

研究発表

バガン期ビルマ文字の「組成」

澤田 英夫 (東京外国語大学)

日本語の呼びかけ詞「あんた」とフランス語の心的与格

林 博司 (神戸大学)

第 6 5 回例会

2004 年 7 月 10 日(土) 午後 1 時 30 分～4 時 45 分

京大会館 102 号室

研究発表

ダバ語(川西走廊諸語)の助動詞について

白井 聡子 (京都大学)

Language Use and Linguistic Structure

柴谷 方良 (ライス大学)

## 量の表現における否定的／肯定的スケールについて

服部 匡

英語のような言語では few, rarely など「否定的な」量表現が存在し、否定倒置を起こすなどの統語的特徴をも持つ。日本語ではこれに直接対応した現象はないが、「少ない」等を述語として用いた文では、否定文に一面平行した現象が観察される。

すなわち、存在や量の多少を表わす述語のうち、「ない/わずかに/少しだ/少ない」などは下向き（否定的）のスケール上に配置され、いわゆる中立叙述の無題文での使用が制約される。

例えば(1)ab の相違は、言わば白紙の状態を基準としてそこに何かがあるようになった状態を認識できるが、白紙の状態を基準としてそこから何かが無くなった状態を認識できないことによる。これに平行した(2)ab の相違は、「多い」は「ある」を含意するので対象の存在と多さを同時に認識することができるが、少なさについてはこのようなことはできないことによる。

(1)a 猫がいる。

b \*猫がいない。

(2)a ポプラの木が多いなあ。

b \*ポプラの木が少ないなあ。

「多く/少なく ある」のように、否定的スケール上に配置される形容詞を副詞的・量限定に用いることはできない（適用量領域の限定された「数少ない」でも同じである）。「大きく/小さく 異なる」等も同様であるが、これらの量表現は事態成立の度合を量的に計る働きをしている。

一方、「少し、僅か（に）」などは述語として用いる場合は下向き、副詞的な場合は上向きとスケール方向性を変える。これらと「小さく」等との相違はおそらく、形容詞述語と形容動詞・名詞述語の機能的相違に関連する。

現代日本語では、ある述語を肯定形式で断定したならば、0でない量についての事態成立が保証されなければならないように思われる。

ただし、「稀に見る」のような言い方は上記の例外となる。

他に「だけ」や「しかへない」構文等との関連に触れた。

(はっとり ただす)

## バガン期ビルマ文字の「組成」

澤田 英夫

「ビルマ文字は、モン文字の文字体系をそのまま借用しビルマ語の表記に適合するよう一部改変したものである」(藪 2001:812) という説に異を唱える人はまずいない。ただ、モン文字が表音文字である以上、「ビルマ文字がモン文字の体系を借用した」ということは、「ビルマ語のどの音をどの文字で表記するか決定する際に、モン文字と言語音の間に成り立つ「表音関係」を参照した」ということを意味するはずだが、従来この点が十分考察されてきたとはいえない。本発表では、バガン期(11-13c)のビルマ文字(古ビルマ文字:OB-S)とモン文字(古モン文字:OM-S)の体系を文字要素類ごとに比較し、「モン文字の体系の借用」が実際どのようなものだったのかについて考察する。

モン文字・ビルマ文字の構造は下図に示すように、子音基字( $C$ )あるいは母音基字( $V$ )とそれを取り巻く諸要素からなる。

$(C_p)(v)(C_r)$				$(C_r)$		$C$ : 子音基字, $V$ : 母音基字, $C_s$ : 子音下字, $v$ : 母音記号, $C_p$ : 前倚子音字, $C_r$ : 末子音記号, $C_f$ : 末子音字
$(v)$	$C$	$(v)$	$(C_f)$	$V$	$(C_f)$	
$(C_s)(v)$						

各要素の字形とその配置のしかたについては、通説通り OB-S が OM-S のうち必要な部分を採用したと考えて間違いない。 $v$  の digraph や、 $C_f$  が義務的に *virāma* を伴うことも、OM-S から OB-S に継承されたと考えられる。

次に表音関係について検討する。OB-S が参照した表音関係の候補として、(1)OM-S と古モン語の間の表音関係、(2)OM-S とアーリア系言語(サンスクリット、パーリ語)の間の表音関係、以上2つが考えられる。

母音記号  $(v)\{-a\}/\{-aa\}$  は OB-S では常に声調の異なる同一の母音を表し、OM-S では常に異なる母音を表す。また  $\{-i\}/\{-ii\}$ ,  $\{-u\}/\{-uu\}$  は、OB-S では  $\{-a\}/\{-aa\}$  と同様であるが、OM-S ではいかなる対立も書き分けない単なる綴字の変異である。以上より、OB-S の  $v$  (および  $V$ ) の表音関係が上記(1)を参照したものではないことは明白である。ここで参照したのは(2)であろう。

OB-S の  $C$  の表音関係については(1),(2)いずれを参照した可能性もありそうに見えるが、インド系文字の祖であるブラーフミー文字で反舌音を表していた  $C$  の系列のうち、OM-S で  $\{D\}$  だけが特殊なふるまいを見せ、OB-S にはそのようなことが見られないことから、この場合も(2)を参照した可能性が高い。

声調表記については、OB-S では3声調のうち creaky tone だけが他の2つ(level, heavy)から書き分けられた。creaky tone の表記には声門閉鎖音を表す  $\{ @ \}$  を含む  $C_f$  が関わり、これは OM-S によるアーリア系言語の表記に含まれない要素である。よって creaky tone の表記は、(1)に基づきこれを古ビルマ語の音韻体系に照らして再解釈・拡張したものであると考えざるを得ない。

(さわだ ひでお)

日本語の呼びかけ詞「あんた」とフランス語の心的与格

林 博司

日本語では二人称代名詞は殆ど用いられないが、呼びかけとしての「あんた」はよく用いられる。この「あんた」には以下のようにいくつかの用法がある。

- (1) あんた、グリーンピース嫌いだもんね。
- (2) あんた、頭いいねえ。
- (3) あんた、USJはもう最高なんだから。
- (4) だから、もうあんた、十月だものねえ。

(1)の「あんた」は述語の項になっている。(2)では項ではないが項の「頭」の所有者として命題につながっている。(3)では項ではなく、命題の外に出て命題の内容を強調したり命題の意外性を述べたりする。(4)では命題に対する積極的な係わりはなく、単なる注意喚起にとどまっている。発表で扱ったのは(3)のタイプの「あんた」で、この「あんた」が自然に感じられるためには、対人モダリティがあること、命題に強調や驚きの意味が含まれることが必要であることを述べた。また、発表では述べなかったが、呼びかけには程度性があり、(4)タイプが最も呼びかけ性の高い完結型のケースである。

このような、命題から離れていわば文副詞的に命題を修飾する代名詞の用法は日本語以外にも見られる。それはフランス語、ドイツ語等に見られる「心的与格」(datif éthique)である。更に、(2)のタイプの「あんた」に対応するものとしてフランス語では「拡大与格」(datif étendu)が存在する。次の例(5)が心的与格、(6)が拡大与格の例である。

- (5) Je te bois dix pastis en trois minutes !

(僕はね、あんた、なんと3分で10杯のパスティスを飲めるんだよ！)

- (6) On lui a tiré les cheveux. (君は誰かに髪の毛を引っ張られた)

この心的与格は、①他の与格と共に起できる、②それ自身二度出ることができる、③遊離要素とは共に起できない、④係り先は文全体である、⑤感嘆・強調のモダリティが必要である、等の特徴を持っており、①、③以外は「あんた」と同じ性質である。また、普通呼びかけの代名詞として用いられる強勢形の "toi" や "vous" は、必ず主格形の "tu" や "vous" で受け直されねばならず、また、これらの持つ強調の意味は代名詞自身が対象であり、文全体には及ばないこと、から、上で述べた「あんた」とは対応しない。ただ、心的与格は、制約が強いものの1人称にも見られ、この点が「あんた」とは異なる。

「あんた」と心的与格は、代名詞として共通の出自を持ち、意味的には命題の外にあって命題を「修飾」という同じ機能を果たしているが、「あんた」は「呼びかけ詞」として形態・統語的には命題の外に出、心的与格は呼びかけの働きはせず形態・統語的には命題の中に留まっている。この違いが文という単位の捉え方にどういう視点を与えるのかについては述べることはできなかった。

(はやし ひろし)

## ダバ語（川西走廊諸語）の助動詞について

白井聡子

ダバ語は、チベット語圏東縁部のいわゆる「川西民族走廊」で話されるチベット＝ビルマ系の言語である。ダバ語には、動詞の後に置かれて時制やアスペクトなどを表示する助動詞のそれぞれに、形態的に関係の深い2種類の語彙が存在する。この2系列の助動詞は何らかの状況に応じた使い分けがなされている。この現象は先行研究において、周辺言語の人称・数が表示される現象と同質のものと捉えられ、主語の人称に応じて使い分けられると記述されている。しかし、発表者の調査では先行研究の説と矛盾する現象が多く見られた。本発表では、上方言群の一つであるメト方言の調査資料をもとに、ダバ語についての概況を紹介した上で、この2系列の助動詞の機能上の特徴について考察を行った。

まず、先行研究が「1人称形式」としているものを「A系列」、「3人称形式」としているものを「B系列」と呼び、以下のような助動詞体系を示した。なお、先行研究がこれらと同列に扱っている *ta-re* および *tre* は助動詞のあとの位置に生起する要素であるとして、助動詞表から外した。助動詞位置が空白になってテンス・アスペクトが捨象される現象についても言及した。

	未完了	過去	完了	経験	可能
A	ɬɕɿ	ɬɕjie ; ɬɕcie	ɬwu	ɬna	ɬndu
B	ɬɕɛ	ɬɕcia	ɬwua	ɬna	ɬndue

これらの助動詞の使われ方に関するいくつかの現象を観察した。その上で、チベット語との対照を通して、A/B両系列の助動詞が広義の *evidentiality* に基づいて以下のように使い分けられていると結論づけた。

- A系列助動詞は話者の主観的判断に基づいて述べていることを明示する。
- B系列助動詞は事態を第3者として捉え、客観的に述べていることを表す。

(しらい さとこ)